

---

# 死神と私

冬華白輝

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

死神と私

### 【Nコード】

N3683Z

### 【作者名】

冬華白輝

### 【あらすじ】

突然死んでしまい死神に追いかける羽目になってしまった主人公。

死神に説得されて向かった先は死因を調査するための施設。そこで自分の死因を知った主人公は、閻魔をめぐる事件に巻き込まれて調査することに・・・。

## 死神と出会う(前書き)

ミステリーというにはおこがましく、ファンタジーというほど剣と魔法が出るわけでもなく・・・ですが、楽しんで読んで頂ければ嬉しいです

## 死神と出会う

目の前に突如現れた黒い影。

実家の職業柄か、それがいったい何なのかわかってしまった私は、目を合わせる寸前に身を翻し、その影から逃げた。

それは、死神と呼ばれるものだった。死神が迎えに来たということとは、今の今まで病気らしい病気もせず、元気だけが取り得の私に寿命がきてしまったというのか。

たった16年しか生きていないのに……。 “まだ、死にたくない！” そう思っつて、裸足のまま私は逃げた。

『里乃……里乃……』

逃げても逃げても、死神の声は追ってくる。

「……チツ……里乃、逃げんな、てめえ！」

いきなり口調が、がらりと変わった。私は思わず振り向いてしまい、死神と目を合わせてしまった。

ぜえぜえといいながら、その死神は私の肩を掴んだ。

「捕まえたぞ、死神と目を合わせたらそれでお終いつてのは知ってんだろ?・・・よし、じゃ、行くぞ」

「・・・あの世に?」

私は聞かなくても解ることを聞いた。死神は、いやな顔もせず、律義に答えてくれる。

「ああ、あの世、天界、天国、霊界、いろいろ言い方はあるが、そこだ。・・・でも、フツー直行するんだが、おまえ達みたいな若い連中は特別、そこに行く前に調査される」

「え、どうして?」

私は思わず聞き返していた。

「・・・何で鬼籍に載っちまったのか、調べんだよ」

死神は天を仰ぎながら、ぽりぽりと鼻の頭を掻く。あまりにも人間らしい仕草に、私は妙にこの死神に親近感を覚えた。

「・・・でも、結局はあの世行きでしょ?」

「いや、場合によっては、死神になったり、調査チームに配属させられたりすることもある」

さらりと答えた死神に私は驚いた。

「じゃあ、死神、あなたも？」

死神は眉をひそめて不快げに私を見る。

「死神って呼ぶな。オレにだって名前くらいある。和幸かずゆきって呼べ。・  
・まあ、答えはYesだ。オレも18で死んで調査の結果によつて死神になった」

「調査の結果って？どんな結果がでるとそうなるの？」

「・・・呪殺だと死神、生け贄および身代わりだと調査チームだな」

「それって、本来死ぬはずではない人じゃない」

「ああ、そうさ。だから、こうして半死半生みたいな生活してんのさ。生き返れるわけじゃねえからな。死神の仕事はメインはこういう鬼籍に載ったやつを迎えだが、許可が下りれば自分の復讐も可能だ。自分を殺したやつを殺す。調査チームの場合は、生け贄にした人物、もしくは自分が身代わりになった相手を鬼籍に載せることができる」

死神、和幸はそう言って、にやりと笑う。まるで、それが目的で死神になった、とでも言うように。

「そ、そうなの。・・・私は、どうなるのかな？」

「フツーに理由があつての死亡ならソツコーあの世行き。でも、オレには、どーもおまえがフツーに死んだとは思えねえ。多分、死神か、調査チーム入りは間違いねえな」

和幸はそう言つと、私の頭を軽くこづく。

「さ、無駄話はここまでだ。・・・行くぞ」

「う、うん」

私はあの世に連れて行かれることは変わらないというのに、さっきまでの恐怖が嘘のようになくなっていくのに気がついた。

和幸のおかげかもしれない。

## サーチオーロラ

私達は調査するための施設“しつちやうしつ 調査室”というところに来ていた。和幸が腕のエンブレムを見せると扉が開く。

バリアーのような光の幕をくぐると次の瞬間には、まるで病室のような白を基調とした広い部屋の真ん中に私達は立っていた。

「秋波里乃さん、前に進んでください」

「あ、はい」

目の前にある大きな机に座っている、女の人に手招かれる。

「里乃さん、あなたの健康状況は非常に良好でした。まず間違いない、鬼籍に載るのはもっと先だったはずです」

「え、あ、そうなんですか・・・」

間抜けな答えを返してから、私は和幸に視線を向ける。

「調査するんじゃないの？」

「さつき、光の幕をくぐったろ？あれで全部調査できるんだ。ええと、なんつったっけか？」

「サーチオーロラです」



和幸が聞くともう何回も聞かれているようで、ウンザリといったように女の人は溜め息混じりに答える。

和幸はそう、それぞれ。と言いながら私の方に向き直る。

「そのサーキンなんかつてのが、ゼーんぶ調べてくれるわけさ」

「サーチオーロラ！」

ガタン、と立ち上がった女の人は堪忍袋の緒が切れたという顔をしながら叫んだ。

「解ってるって、サーモンチキンだろ？」

「・・・かあくずうくゆうくきいいい・・・」

「そんなに怒んなよ、沙希。サーチオーロラだろ？冗談も通じねえヤツは嫌われッぞ」

和幸はけろりとした顔で言うと、沙希さんの方に私を押しやる。

「で、こいつはどっちよ？」

「決定権は上官の志貴様にあるわ」

「でも、大体の所は解るんだろ？」

ずいっと和幸が身を寄せると、沙希さんはたじろぐ。

「・・・規律違反だよ、和幸。調査チームから死神が情報を聞き出

してはいけない」

「志貴！」

なおも和幸が沙希さんに聞き出そうとしたとき、私の後ろから声がかかる。ビツクリしたのは私だけではないようで、和幸も沙希さんも驚いた様子でこちらを見ている。

私の真横に來ると、志貴と呼ばれた男の人は私に笑いかけた。

「里乃さんには後ほど個別にお知らせします。まずはこれから使う部屋の方に案内させましょう」

「あ、はい、ありがとうございます」

「志貴！なんで、おまえが最前線の照査室までくんだよ？」

和幸は掴みかかりそうな勢いで志貴さんにくっついてかかる。

「・・・里乃さん、和幸は何か失礼なことをしませんでしたか？」

「おい！志貴！無視すんな！」

「いえ、別に・・・あの・・・？」

かみつく勢いで真横で叫ぶ和幸と、それを平気な顔で無視している志貴さんに目をやる。志貴さんは戸惑う私を見てクスリと笑う。

「ああ、僕と和幸は上官と部下という関係以前に兄弟なんですよ。ちなみに僕が兄で和幸が弟です。詳しい話はあとで和幸に聞くといい

いですよ。しばらくは和幸があなたのサポートにつきますから」

「あ、はい」

私は和幸を見る。和幸はじつと志貴さんを睨むように見つめている。

「そうそう、僕がどうして本来いるべきはずの閻魔様の元を離れてここに来たかっていうとね、しばらくの間、照査室を閉じることになったからだよ」

笑顔のまま、志貴さんは先ほどの和幸の質問に、やっと答えを返す。

「照査室を閉じる！？？どういことですか？志貴様」

沙希さんが驚きの声をあげると、志貴さんは表情を曇らせる。

「うん、閻魔様がおっしゃるには、ちょっと問題が起こったみたいでね。今日は里乃さんが最後だったようだからここを一番最後に閉じることにしたんだよ。他の所はもうみんな閉じてある。・・・それで、君達を信頼して、頼むんだけど・・・」

「内部調査か？」

志貴さんの科白を和幸が引き継ぐ。志貴さんはじつと和幸を見つめ、頷く。

「頼めるかい？和幸」

「これやったら・・・」

「・・・許可が下りる可能性は高くなるね」

「じゃ、やる。沙希も里乃も勘定に入ってるのか？」

「・・・沙希だけ。里乃さんには他の仕事を頼むことになりそうなんだ。それも後で里乃さんに直接お知らせしますから。・・・取り敢えずここは閉じる。沙希は本部に戻ってくれ。和幸は里乃さんを部屋に案内して」

志貴さんの指示に二人は大人しく従い、私は和幸に連れられ照査室から宿舎に移動することになった。

## 宿舎へ向かう

照査室の奥に進むと宿舎へと向かう長い廊下が続いていた。

ずらっと並ぶ扉がすべて他の照査室に繋がっているのだと和幸が教えてくれる。他にも大きな扉があったが、関係者以外立ち入り禁止の札がかかっていた。

「ねえ、志貴さんって死神？それとも、調査チームの人？」

宿舎の中に入り部屋に案内される途中で、私は沈黙を嫌い和幸に色々質問していた。

和幸も嫌な顔一つせず、私の質問に答えてくれる。

「志貴はどっちでもねえよ。あいつは、閻魔の参謀さんぼうさ」

「参謀……？それって偉いの？」

「偉いも何も、志貴の言葉は閻魔の言葉ってくらいに……」

和幸はそう言ってから、肩をすくめた。

「実際、志貴と直属の部下のヤツら以外に今の閻魔の姿を見たヤツはいねえ。あいつが閻魔じゃねえかって言う奴もいるくらいだ。でも、志貴より先にこの機関に入ってた連中はそれはないと否定する。ま、それもほんの少しの人数だけだな」

和幸の言い様だとずっと前からここにいるのだと言っているようで、私は不意に彼等の年齢が気になった。

「・・・いくつなの？和幸と志貴さんって」

「死んでからの年もプラスすると、俺が生まれたのが、1824年だから・・・」

「嘘！？今、2012年だよ？すごいお爺さんじゃない！！・・・」

私は思わず叫んでから、慌てて手で口をふさいだ。

「へいへい、どーせ俺等はジジイですよ・・・。この機関でもかなりの古株にあたりますよ・・・」

拗ねたようにブチブチと文句をたれつつ、和幸は私をうらめしそうに見やった。

「1」、「ごめん。・・・つい」

私は恐縮しきりで謝った。和幸は肩をすくめ、苦笑する。

「良いさ、慣れてるからな。・・・今、この機関にいる連中の半分くらいは、志貴が死神だったときに連れてきた連中さ。俺もその一人」

「え、じゃあ、志貴さんっていくつで死んだの？」

「4つ上でさ、俺と同じで、18の時に死んだんだ。それだけでも

作為的なことを感じるだろ？」

私は頷き、和幸の顔を見上げる。

「俺達はマシな方さ。年齢制限で弾かれて呪殺されてたつてあの世に送られる奴もいる。こつやつて現世とこちらを行き来することすら許されねえ」

「年齢制限つて、どれくらいまで？」

「そつだなあ・・・本人の身体能力にもよるが、大体25、6だな」

和幸はピツと人差し指をあげて、答える。

「30でもいいんだが、その年齢になると呪殺とかで死んだヤツの割合自体が減つてくる。調査チームが無駄な調査と説明をしなきゃなんなくなる割合が増すつてわけさ」

少し声が低くなる。

あまり口にしたくない現実なのだろう。本当なら誰でもそのチャンスを与えられて良いのだ。

もちろん留まることを望まず、来世に希望を託す者もいるだろうが。

私は復讐とまではいかなくても、誰が何のために私を殺したのが知りたいと思う。

しかし未だに死んだという認識が湧かない。こつして和幸と並ん

で歩いて話をしているせいかもしれない。

「そっか。・・・確かに呪殺はともかく、生け贄や身代わりは若い方がいいもんね」

「そうそうって・・・おまえ、随分、ふっきれた物言いするな」

和幸が呆れたように言うと、私はクス、と笑った。

「私、順応能力が高いことだけが取り柄なの。それに・・・家が家だからね」

「・・・くく、なるほどな」

私の実家の職業を知る和幸は苦笑し、【B・556】というプレートがかかっている部屋の前で止まる。

「着いたぞ、ここがおまえの部屋だ」

和幸は懐からカードキーを取り出すと、ドアの脇のセンサーに通す。

機械音が鳴り自動扉が開く。随分と先進的な作りになっているので軽くショックを受けた。あの世がこんなに機械化されてて良いのだろうか???

イメージとのギャップに呆然としてしていると和幸がポン、と肩を叩く。

「入れ、色々と説明することがある」



「うん」

## 豪華な自室

私達は部屋の中に入って、取りあえず周りを見回す。

「ま、いつも清掃班が回ってくるからな。綺麗なもんだろ。今日からはおまえが掃除すんだぞ。当たり前だけどな」

「うん」

「食事は食堂でとる。メニューはいろいろあるぞ。・・・ここでは金の役目を果たすのはこのルームキーだ。これで食事の代金を払うって形になる。・・・無くすなよ？」

和幸はそう言って、さっきのカードキーを私に渡してくれる。

「えっ?・・・食事をするの?」

思わず訊ねた私に、和幸は肩をすくめた。

「あー、死んでるって言っても俺たちは中間の者だからな。死んでもねえし生きてもねえ。一応、動力源は食べ物ってコトになってるが・・・実際、ここの食べ物は何で出来てるかは誰も知らない。知ってるとしたら・・・。まあ、この世界の元からの住人くらいだな」

「元からの、住人・・・?」

「ま、それはおいおいな。・・・他にも必要なもんが出てくるだろうが、それも全部このルームキーで手に入れられる。趣味のものと

かな」

「へえ、そうなんだ。・・・それにしても、家具も家電も全部そろってるのね」

「そりゃ、誰だって少しでも快適に暮らしたいだろうが。そういう配慮くらいねえと、やる気が失せんだろ」

「ん、確かに。それでなくても、死ななくても良いのに死んだんだしね」

私はそう言うと、続き部屋の奥の方をのぞき込む。まるで、高級ホテルのスイートルームのようだ。

「豪華、一人で住むには広すぎるくらい」

「そうだな。でも、それに見合う仕事をするからな」

「そっか」

和幸は私の“なぜなに攻撃”に苦笑をしながら、ここで暮らすための注意点などを教えてくれた。

私が一番驚いたことは、ここでは、望んだものすべてが手に入るということだった。

和幸が例えたのは、高級なバッグや宝石類だったが、他にも思い出の品や無くしてしまった宝物でさえも手に入るというのだ。

どういう仕組みになっているのかはわからないが、どうも、この

世界を形成するものが影響しているらしいとだけ和幸は教えてくれた。

一通りの説明を受け終わり、私はリビング（といえる部屋）のソファーに深く腰掛けた。

「・・・私、結局どうなるんだろ」

「後で知らせるって言ってたし、気にすることはねえだろ。あ、そうそう。俺の部屋はこの向かい側だから何かあったらいつでも呼べよ。寂しいなら添い寝だっしてしてやるぜ？」

ぼそつと呟くと、ニヤリと意地悪そうな笑顔をつかべて、和幸はそう言った。

「結構です。・・・言っとくけど、夜這はらみいに来たら殴るわよ」

「つかあゝ、参ったな。最初にクギさされたのはさすがに初めてだぞ」

「当然、そう言わせるような言動をするからでしょ」

私はじとつと和幸を見た。和幸は苦笑をつかべて肩をすくめる。

「いい根性してるよ。・・・じゃ、取り敢えず休んでな。俺は仕事しに行くけど、何かあったら・・・そうだな、そこら辺のドアホン押しまくって誰か呼べ」

「うん、わかった。行ってらっしゃい」

私は立ち上がるとニッコリ笑って手を振った。和幸は少し目を見張り、はにかんだ笑みをうかべ頷いた。

「行ってらっしゃいなんて言われるのは、何十年ぶりだろうなあ・・・じゃあ、行ってくるよ」

私は和幸を送り出すと、ドサツと備え付けてあったソファーに座った。

## 北庁舎

「疲れた〜・・・いろんなコトがあり過ぎて・・・もう飽和状態だよ〜」

リリリリリ、リリリリリ

呟いた矢先、部屋の電話が鳴り出す。私はあわてて受話器を取った。

「は、はい、秋波あきなみですッ」

『・・・里乃さん？』

「あ、はい、志貴さん・・・ですか？」

『そうです。ああ、それから、名字はもう使わない方がいいですよ、呼ぶのに困るから、个体名として生前の名前を使っているだけで、下ではもう死んでいる身ですし、【家】はもう関係がなくなりますから。・・・和幸に聞きませんでしたか？』

「そ、そういうのは聞かなかったです」

『そうですか。・・・まあ、おいおいそういうことは説明していきますから、お気になさらず』

「は、はい。あの、それで私はどっちになるんですか？死神か調査チームか。それに私の初仕事って・・・」

『まあ、そう慌てないでください。・・・今、迎えをやりました。閻魔様の直属の部下であなたと同じ年頃に死んだ女の子ですから、そんなに警戒もしなくて済むでしょう。詳しくはこちらにて説明するので、迎えの者と一緒にいらしてください』

「あ、はい、解りました」

私は通話を終えると、志貴さんの言っていた女の子を待つことにした。

驚きの連続で他のことを考える余裕が無かったが、ようやくその余裕が出てくる。突然私が死んで、母さん達は驚くだろうな・・・そう思った瞬間、寂しさがこみ上げてきた。

「もう、家には帰れないんだ・・・」

しばらくたつてから、ドアの向こうに人の気配を感じて、私は壁についているモニターを見た。そこには一人の女の子の姿が映されていて、なかなか、ドアホンを押せないでいるようだった。

見かねて、私はドアを開けてあげることにする。

「きゃー！」

ドアが開くと彼女は小さく叫び声をあげた。私は笑いをこらえながら尋ねた。

「あの、何か御用ですか？」

「あ、あのつ、わ、私、志貴様に命じられて・・・え、閻魔様の所に、ご、ご案内に・・・」

彼女はかなりどもりながら、必死に私に解るように説明しようとしていてなんだか微笑ましくなる。

「じゃあ、連れてって。・・・あ、自己紹介しよう！私は里乃。16歳。宜しくね」

「あ、はい。・・・私は由樹ゆきといいますが。ええと、年齢は数えてないので、死んだのは里乃さんと同じ16です」

「んじゃ、同じ年だね。だって死んじゃったら年なんてとらないから・・・でしょ？」

「は、はい！そうですね」

私と由樹はそこから意気投合し、最初はつまり気味だった由樹の言葉も、すらすらと出てくるようになり、北庁舎きたちやうしゃ（閻魔様が仕事をするところらしい）につく頃にはまるでずっと昔からの友達のようになっていた。

「里乃さん、こっちですよ」

由樹が手招くまま私はついていく。



閻魔様の元へ近づくと、ひんやりとした空気が漂ってくるように思う。

そして、大きな回廊に出ると奥に扉が見えた。

「あの扉の向こうに、志貴様と閻魔様がいらっしやいます」

「う、うん……」

回廊を進み、私達は身長は何倍もある大きな扉の前で立ち止まった。

「志貴様、由樹です。里乃さんをお連れしました」

由樹はそう言うと、返事を待った。

『入りなさい』

扉の向こうから、志貴さんの声が聞こえる。私達はその言葉に従い、自動的に扉が開くと同時に、部屋に入る。

「ようこそ、里乃さん。……由樹、ご苦労だったね」

「……はい、志貴様」

由樹は頬を赤く染めてうつむく。私はすぐにピンときた。由樹はどつちら、志貴さんのことが好き、らしい。

「あの、私……」

「お話は直接、閻魔様に・・・」

私の言葉を遮り、志貴さんはそう言って、部屋の中央にある階段の上の方を見る。

「この上に、いらっしやいます。・・・さあ、行って下さい」

「・・・私だけで、行くんですか？」

「そうです。・・・我々は、同席は許されていません」

私の確認に志貴さんは頷き、さあ、と私を促した。私はどきどきする胸をそつと押さえて、一歩ずつあがっていく。

そして、赤くて厚いカーテンがある所まで来ると、後ろを振り向く。志貴さん達が心配そうにこっちを見ているのがはっきりと見える。

私は前に向き直り、すう、と息を吸い込んだ。

「里乃です」

『どーぞ』

私は息を呑んだ。・・・この声は、女の子の声？

『・・・里乃？』

いぶかしんだ声で名前を呼ばれ、私は意を決してカーテンの中に

入  
っ  
た。  
。

## 閻魔族

私は思わず見とれてしまった。まだ、小学校5・6年生くらいの女の子の姿。紫がかかった青い髪に藍色の目。他の誰とも違う容姿。立場さえ知らなければ、ぎゅうって抱きしめたいくらいの美少女だ。

「・・・そっか、驚いてるんだ。閻魔がこんな子供だから」

私が顔に出していたのか、閻魔様はニツコリと笑ってそう言った。そんなに気分を害したような気配はしない。長い髪を指先でくると遊ばせている。

「あ、いえ。閻魔様・・・」

「うん、いいの。気にしてないから。それと、閻魔って呼ばれるの嫌だなあ・・・。あたしも名前くらいあるのよ?」

閻魔様は和幸と同じようなことを言う。

「・・・教えて頂けるんですか?」

「うん。・・・あたしの名前は、冥<sup>めい</sup>」

「冥様?」

閻魔、冥様は反芻する私を見て、ニツコリと笑った。

「・・・それで、私のお仕事っていうのは?」

気を取り直して本来の目的を尋ねる。冥様は途端に真剣な表情になった。

「照査室まで閉めなければならぬくらいの大事を起こしてくれた裏切り者を、あたし自身の手で捕まえてやりたいのよ。・・・ああ、和幸達のことを信頼してないってワケじゃないのよ？」

「それって・・・」

「そう、里乃の最初のお仕事は、あたしの護衛。しかも、あたしが閻魔だつて誰にも知られないようにすること。いい？」

可愛らしく、首を傾げてそう告げる。私は驚きを隠せないまま、冥様に尋ねる。

「・・・私なんかで良いんですか？志貴さん達の方が・・・」

「あなた、知らないの？・・・自分の体に流れていた血の元となるモノ。そして、あなたの魂に受け継がれた力を」

「え・・・血？・・・力？」

私は戸惑う。確かに秋波家は代々巫女を排出する家ではある。だが、冥様が言う“血”や“力”は違う意味に聞こえた。

「あなた、不思議な力を持っているでしょう？どうして、そんな力を持っているか、考えたことある？」

私は首を横に振る。冥様は戸惑いの表情を浮かべる。

「・・・なんで、何も教えなかったのかしら。まだ、先のことと思  
っていたの？」

「あの・・・？冥様？」

「・・・あのね、あなたの家系には私達、閻魔族えんまぞくの血が流れている  
の」

言い辛そうに、冥様は告げる。私は一瞬何を言われたのか理解で  
きなかった。

「え、閻魔族？」

「そうよ、閻魔族は昔からこの世界に住んでいる一族よ。この世界  
は閻魔界と言ってるね？人間達の言うあの世への通過点。三途の川と  
も言えるわ。・・・閻魔族の役目は、ここに来た人の生前の善行、  
悪行を見て、あの世の行き先を決めることが主だったこと。他にも、  
死神達や調査チームの監督もしているのだけど」

冥様の説明に私は頷く。しかし、私の中に何故閻魔族の血が流れ  
ているのが理解できずにいると、冥様は上目使いに私を見る。

「自分のお父様のことは、覚えている？」

「・・・小さな頃に、死んでしまったから」

私は、首を横に振りながら答えた。それを聞いて、冥様は納得し  
たようだった。

「そういうコト・・・あのね、里乃。秋波家は閻魔族との婚姻を繰り返していて、強い閻魔族の血をひいていた。そしてあなたのお父様とあたしの父は、兄弟なの。あなたのお母様は、再び閻魔族と縁を結び、子を宿した。・・・つまり、あたし達は従姉妹同士」

思い当たる節があった。巫女の修行をする際にいつも聞かされたこと・・・。

「そういえば、いつも母から聞かされてきた秋波家の伝説がありました。ただし閻魔族ではなくて天神の血をひく、そう聞いていたんですが」

「天神でも間違いではないわ。閻魔族は天神の一員だもの。秋波家の巫女の力は閻魔族の血が入っているから、強いよ。・・・理解できた？」

「ええ・・・でも、なんだか驚き過ぎて」

私はめまいを起こしたように、ぐらぐらと足下が揺れるのを感じた。

理解はした。でも、心がついていかない。

「何も知らなかったのなら、当然ね。・・・ねえ、里乃お姉ちゃんって呼んでイイ？あたしのは冥って呼び捨ててくれて構わないわ。・・・あたしは12歳であなたより年下だし」

「そ、そうなの！？・・・てつきり、見た目より年上なんだろうな」とかって思ってたわ」

和幸や志貴さんといった例があるから、冥が年下と知り私は驚いた。

「あたし達はある年齢に達するまでは人間と同じように成長するの。だから里乃お姉ちゃんもちゃんと今まで成長してたでしょ？」

「そういえば……って、私も？だって、母さん達はちゃんと年を重ねて……」

「うん。だって、里乃お姉ちゃんのお母様は人間の血の方が濃いもの。里乃お姉ちゃんは逆ね」

聞き返した私に、冥は答えてくれる。

「そうなんだ……。それって、父さんが閻魔族だから？」

こつくりと頷いて、冥は肯定する。

「そう。あなたのお父さまはもう300年以上生きていた方だったけど、見た目は若かったはずよ。300歳なんて閻魔族ではまだ若い部類なの。でも死神や調査チームとは違って死ぬことはあるわ。あたしの父やあなたのお父さまのようにね。」

「私はどうなるの？一応閻魔族の血は引いてるけど、もう死んでるんでしょ？」

「死んでなんていないわ。魂の安全の為に無意識に器を捨てただけだもの。天神の一族だから、精神体が本来の姿だしね」

「そうなの！？……でも、鬼籍に載ったから、死神が迎えにきた



んでしょ？」

冥は少し考えるそぶりを見せて、頷く。

「・・・身体から魂が離れば鬼籍にその名前が刻まれるの。ここに来る前にサーチオーロラをくぐったと思うけど、そこでも何の不審も出なかったでしょ？まあ、ちよつと志貴にお願いしていじってもらったんだけど。・・・まだ、里乃お姉ちゃんが閻魔族の血を引いてるってコトは他には秘密にしておきたいから」

「志貴さんは知ってるの？」

「うん。志貴と由樹には話したわ。・・・でも、あたしと里乃お姉ちゃんが従姉妹同士、っていうこととかは知らせてない。ただ、閻魔族の血を引いてるってコトだけ」

冥はくすつと笑う。こうして見ていると、本当に見た目通りの年齢なんだと理解できる。

「冥はいつ閻魔になったの？」

「ついこの間よ。前の閻魔であつた父が死んだの。・・・年齢のことで反対の声もあつただけど、結局あたし以上の適任者がいなくてね。・・・まあ、あたしは代理だから良かったんだけど」

「代理・・・？」

冥の言葉に引っかかりを覚える。誰の代理だというのだろう。その事が無性に気になった。

「うん。本当の閻魔が就任するまでの、ね。あたしも、あたしの父もその前の閻魔達もみんな、そう」

「本当の閻魔って・・・」

「えんまほつおう閻魔法王”と呼ばれる存在のこと。それは・・・里乃お姉ちゃん、あなたのコトよ」

冥は微笑んだ。私は、冥の言葉に驚いて、目を見開いた。

## 閻魔法王

「私が、閻魔法王！？・・・本当の閻魔？」

「そうよ、あたしは里乃お姉ちゃんが来るまでのつなぎ役。里乃お姉ちゃんがこんなに早く来ることになったのは、今、騒ぎを起こしている連中の仕業ね。お姉ちゃんが“閻魔法王”であることを知って、力が封印されてる間に魂ごと滅ぼそうと企んだのよ。奴らは本当の閻魔が就任するのは困るんだわ。でも失敗して魂は残った。何故失敗したのかはよくわからないけど秋波家の血筋のおかげかもね」

私は、呆然と冥の言葉を聞いていて、“秋波家の血筋”という言葉葉にハツとして呟く。

「・・・もしかして、母さんは、すべてを知ってた？」

「当然よ。だって、秋波家とはすでに約束済みのハズだもの。・・・長子は閻魔法王になるからいずれは閻魔界に行くよ」

「でも、私そんなこと知らなかった。本当の閻魔って言っても・・・それに、力が封印されてるって・・・」

戸惑う私に、冥は頷く。

「うん。秋波家の人たちももつと先の話だと思っていたのだから。後できちんと説明しに行かないとね。・・・他に伝承でなにか聞いたことはない？強い力を感じたとか・・・。里乃お姉ちゃんの力は人間の世界で暮らしやすいように封じられていたはずなの。それが物

なのかなんなのかわからないけれど」

私は冥の藍色の目に見つめられ、フツとひらめくモノを感じた。

「・・・私、母さんになにか言われた気がする・・・小さな時だからあんまり覚えてなくて・・・」

「それが里乃お姉ちゃんの力に関係してるんだわ。・・・里乃お姉ちゃんは閻魔法王になる定めなの。だから本来の力を取り戻さなきゃ」

「私に・・・どんな力があるのかしら」

不安を抑えきれず、私は冥にすぎるような視線を向けた。

「大丈夫、あたしが守ってあげる」

「でも、それは私の初仕事でしょ？冥を守るって」

私が首を傾げると、冥はいたずらっ子のような笑みを浮かべる。そうすると普通の人間の子どもと変わらないように感じた。

「それは名目上よ。志貴達にはそう言っているの。里乃お姉ちゃんが閻魔法王だって知ってるのはあたしと里乃お姉ちゃんと騒ぎを起こしている連中だけ。だからホントは逆。あたしが里乃お姉ちゃんを守るの。奴らは必ず里乃お姉ちゃんを狙ってくる・・・」

「じゃあ、二人だけの秘密なのね」

冥はニッコリと笑いながら頷く。

「絶対に秘密よ。これはトップシークレットなんだから」

「解ったわ」

「じゃあ行きましょう？・・・最初の話通りにね」

私は頷いて、冥を引き連れて階段を下りた。

「・・・閻魔様」

志貴さんが緊張した様子で冥を見る。

「志貴、由樹。後は頼むわね？・・・あたしは里乃の所にいるから」

「はい、閻魔様」

「お任せください」

二人は深々と頭を垂れた。私は一人に嘘をついていることを後ろめたく思いながら、冥を側に引き寄せた。

「それじゃあ行きましょうか？里乃お姉ちゃん」

冥はくすつと笑いながらそう言って私を見上げた。志貴さん達のはじかれたように顔を上げる。

「そうね・・・冥」

「そうそう、それで良いの。だいぶ慣れてきたわね、里乃お姉ちゃ

ん

にこっと笑い、冥は私の手を取る。

「さあ、宿舎に行きましょう。里乃お姉ちゃん。案内は任せてちょうだい」

冥はそう言っつて私の手をぐいぐいと引っぱっていった。・・・呆然と佇む志貴さんと由樹を残して。

## 考察

宿舎内は広く同じようなドアが続くため、ここで暮らす冥がついていても道がわからなくなってしまうた私達は、迷いながらようやく自室前に戻ってきた。

「里乃っ！」

【B - 556】というプレートがかかっていることを確認して、ホツとしながら冥と共に部屋に入るうとした時、後ろから声をかけられる。

私達は振り返って声の相手を見た。

「和幸……？」

私はその形相を見て声を詰まらせた。かなり怒っている様子で、和幸は私に詰め寄る。

「どこ、行ってたんだ！？ちょっと心配になって戻って来てみたら、おまえ、部屋にいないし！……って、その子は？」

文句の途中で冥の存在に気付いたようで、不審そうに尋ねる。

「冥っていつのよ。私の初仕事」

「……じゃあ、おまえ、死神になったのか？」

「そう、なるのかな？死んだ理由が理由だし」

「そう、なのか」

和幸は少しぼつが悪そうに言った。つまり、死神＝呪殺という式が成り立つからだ。

「まあとにかく、私がこの子の世話をすることになったから。．．．冥、こつちのお兄ちゃんも志貴さんの弟で和幸って言うの。困ったことがあったら、このお兄ちゃんに聞いた方が早いわよ」

「うん、わかった、里乃お姉ちゃん」

冥は素直に返事をした。和幸を見る目は楽しそうに笑んでいたが、和幸はそんなことには気がつきもしない様子で、肩の力を抜く。

「里乃、これで、寂しくなくなったな」

「そーねっ、あなたに添い寝して貰わなくても平気そうよ」

「．．．根に持つなあ」

和幸は私を気まずそうに見やり、それから、クスクスと笑う冥を見る。

「可愛い子だな。．．．でも、日本人じゃねえな」

スウ、と目を細めた和幸に、冥は肩を竦めた。

「当然だよ。だってあたしはこの生まれだもん。誰も、里乃お姉



ちゃんがあたしを“下”から連れてきたなんて言っていないわ」

「じゃあ、閻魔族か・・・？」

和幸はそう言って、冥を見た。

「そつだよ、閻魔様の遠縁って、思っというて」

「わかった。どおりで容姿が普通の人間とは違うわけだ。・・・しかし、最初の仕事がこれとは、随分と大変だな。志貴がやりやいいのに」

はあ、と盛大な溜息をついてみせて、和幸は冥を見る。

閻魔様の遠縁というだけでも絶大な発言力を持っているものなのだ、ここに来る途中、冥に教わった。和幸の溜息はそれを知っているからこそそのものなのだ、理解する。

「志貴さんは忙しいのよ、閻魔様のお手伝いしなきゃならないんだから。・・・そついえば、和幸って、志貴さんとは全然似てないのね」

「・・・まあ、あいつと俺は、母親が違うし？」

軽く返されて、私は慌てる。まずいことを聞いてしまったのだからか？

「え！そうなの？・・・やだ、私・・・」

「気にしなくていいぜ、里乃が考えているようなもんじゃねえから」

和幸は相好を崩してそう言った。私はその顔を見てホツとする。本当に気にしていないような、あっけらかんとした笑みだったから。気を取り直してルームキーをセンサーに通す。扉が開き私達は中に入る。

「心配かけて、ごめんね。和幸が心配して来てくれるとは思わなかったから……。実はね、志貴さんから呼ばれて由樹に閻魔様の所まで連れて行ってもらってたの。そこで、冥を預かったのよ」

「いや、俺もさ、様子見に来て……。ちよつと慌てちまって。悪りい、おまえに対して腹たてることじゃなかったな。おまえが慣れないうちにふらふら出歩いたんじゃないかねえかって思っちまって」

「私、そんなに馬鹿に見える？」

私はムスツとして、ソファアに座る。

「いや……。ごめん」

和幸は向かい側のソファアに座り素直に謝った。頷いて私は身を乗り出した。

「で、内部調査で何か解った？」

「ああ……。あんまり喜べない情報が手に入った。……。どうも、今回ののは大事になりそうだな」

言い淀んでいる和幸を見ながら、私は考えていた。私の力のこと、

冥の言ったこと。そして、私を狙う連中のこと。

「もしかしたら、かなり古参の連中が関わってるかもしれない」

だろうな、と思った。

私と冥の事を知っている人が、比較的新しい死神や調査チームにいるわけがない。冥のお父さまが在位していた頃、側にはべる事が出来て、なお且つ、閻魔族の実情に詳しい人物が怪しい。

だとしたら、古参の人達の方が確率は高い。

「そう、なんだ」

自分の考えは言わずに、ただ和幸の話に耳を傾けた。

探しモノ

「和幸お兄ちゃん、その人達の名前は解る？」

冥が和幸の隣にちょこんと座り、首を傾げつつ、和幸を見上げた。

「ん、いや・・・特定するまではいつてない。だが、怪しいのは・・・幹部連中かな」

和幸は少し考え込んでから、そう答えた。

「幹部つて、死神長13人と調査チーム主任13人の内の誰かってコト？」

「ああ、よく知ってんな、冥」

「だって、あたしは閻魔様の遠縁だよ？それなりにこの機関の仕事のことは理解しているつもり」

冥はそう言ってニッコリと笑った。そして、ついつと入り口の方を見る。

「・・・誰か、来た」

ピンポーン・・・

「里乃さーん、沙希です。いらっしやいます？」

「あ……ハイ、今開けまーす」

私は急いでドアを開けると、沙希さんを引き入れる。

「あら、和幸もいたの？……それと……その子は？」

「あたしは冥。閻魔様の遠縁なの」

冥はさつき和幸にしたように自己紹介をする。沙希さんは少し目を瞞って私を見た。

「冥の護衛が私の初仕事なんです」

「そうなんですか……。それで、里乃さんの所属はどちらになるんです？」

沙希さんは納得したように頷くと、そう問うてきた。

「死神、だと思えます。……はっきりと言われたワケじゃないんですけど、呪殺だったそうですから」

「そうでしたか……。では引き続き和幸が面倒を見るのね。調査チームなら私がと思ったのだけだ」

「……だな」

和幸と沙希さんが話している脇で冥が私を見やり、ソファアールから立ち上がって私の袖を引っ張る。

藍色の目が何かを訴えていた。

「どうしたの？冥」

「お姉ちゃん、ちょっと・・・」

ぐいぐいと引っぱり、不審そうにしている和幸と沙希さんを後目に、冥は私を奥の部屋に連れていく。

「和幸と沙希は信用できると思う？」

「・・・思う、よ？・・・だって、志貴さんも信用して内部調査をお願いしてたんだから」

戸惑いながら答える私に冥は頷いて見せた。確認をしたかっただけらしい。

「そうよね？・・・なら、聞いてみたいことがあるの。・・・父がね、いつか来る閻魔法王に渡すべきモノがある。そう言っ場所のヒントだけ教えてくれたの。・・・前々から不穏な動きはあったし、今回のことを企んだ連中に知られることを恐れたのかもしれないわ。・・・昔からここにいる和幸や沙希だったらそこにあるモノのことは知らなくても場所なら知ってると思わない？」

「うん・・・そう思う」

「じゃあ、善は急げよね！」

私は、早速和幸達に聞こうとリビングに戻るうとした冥の腕を掴んで引きとめた。

「ちょっと待って・・・そのヒントを聞かれても私や冥の関係はバ  
レたりしない？バレルのはマズインでしょう？」

「うん。・・・でも大丈夫！誰に渡すものかっというのは伏せるか  
ら。そうしたら、いくら和幸や沙希でもわからないでしょ？・・・  
犯人でない限り」

冥の言葉に少しどきりとしたが、私は納得して頷いた。

「ええ、そうね。」

私達は部屋に戻ると、和幸と沙希さんに、冥が閻魔でその従姉の  
私が閻魔法王になるという事情を伏せて、探しモノの説明をした。

「それでね、私が父から聞いたヒントはこうよ・・・“ 困われし谷  
間の奥・光の元・望むもの・忘却の赤き炎に己の心を示し表せ”」

「困われし谷間の奥？・・・なんか聞いたことあるな」

「忘却の赤き炎・・・赤い炎って・・・見たことがあったような・・・」

二人はそう呟きながら考え込む。

私達だけでは思い浮かぶどころか、どこから調べたらいいかわか  
らない状態になりかねなかっただけに、二人に思い当たることがあ  
ったということはありがたかった。

「そうか、裁きの間だ！」

和幸が立ち上がる。

「そつよ！裁きの間で見たんだわ！」

沙希さんもポンと手を打って声をあげた。

「裁きの間？」

聞いたことがないのだろう。冥が反芻して首を傾げる。

「閻魔族でも知る者は少なくなってるのか・・・大昔に使われていた照査室みたいなもんだな」

「今は封じられた“死の荒野”にあつたハズよね？」

沙希さんの問いに和幸は頷く。

「ああ。“死の荒野”のさらに奥に裁きの間があつて、そこに忘却の赤き炎と回想の蒼き炎つてのがある。ずっと昔には使つてたが、照査室が出来た今は使われてねえな」

「転送装置は死神長か調査チームの主任じゃないと使えないようになってるし・・・それじゃなくても、危険過ぎて二人では行かせられないわね・・・かといって、私達がついて行くこともできないし」

沙希さんは考え込む風にして言うと和幸を見上げる。判断をしかねるような表情だ。

「死神長の誰かに頼む、とか？」



ちらり、と和幸が冥を見ると冥は激しく首を横に振った。

「ダメっ！お兄ちゃん達は信用してるから教えたの！他の人は今の状態じゃ、信用するなんて無理よ！・・・それに死神や調査チームにあんまり広めたくないの。閻魔族のことだし・・・」

「・・・だろうな」

和幸は頷き、私を見る。

「ともかくだ、危ない所にあるってコトがわかった以上は、二人で行こうなんて考えないこと。俺たちの手が空くまで待ってる。良いな？」

そんな時間はない。と冥が騒ぎ出すと思っただが、意外にも殊勝に冥は和幸の言葉に頷いた。

## 疑う心

「しかし、探しモノっていうのはそんなに大事なもののなか？」

和幸は首を傾げる。

「そうよ・・・私達、閻魔族にとっては大事な大事なモノ。閻魔族全てがそれを手に入れることを望んでいると思っても良いわ」

和幸の問いに答えた冥は私の手を握る。

閻魔族の悲願　それが、閻魔法王の誕生なのだ冥は教えてくれた。

「・・・そうね、閻魔様もそう仰っていたし」

「閻魔に直接頼まれたのか!？」

和幸が仰天したように目を見開く。沙希さんもよほど驚いたのか、呆けたように私を見ている。

「うん、おかしい?」

「・・・いや。滅多に志貴の前にも姿を現したりしないらしいのに、いきなり新参者の里乃に声をかけるなんて・・・珍しいこともあるもんだと思ったただけだ」

和幸は肩をすくめるとそう言った。

私は苦笑いを浮かべるしかなかった。目の前にいるこの小さな少女が現在の閻魔だと知ったら和幸達はどう思うのだろうか？

そして“閻魔法王”が私だと知ったら……。

「……でも、どうして里乃さんだったのかしら」

ポツリと沙希さんが呟く。

「何がだ？」

和幸が首を傾げると、沙希さんは肩を竦める。

「だってそうでしょう？他に任せられる人はいたはずなのに、まだ死神になったばかりの子に頼むなんて……もしかしたら、里乃さんにも関わりのあることだったりするのかしら？」

沙希さんがそんなことを言うから、私は心底びっくりした。

「え！？……私にも、ですか？」

「だってそうでしょう？閻魔族に関わることで詳しい事情は私達にも説明できないのに、里乃さんは普通に説明を受けているわ」

「たしかにそうだなあ……でもよ、ただ単に里乃が冥の護衛にちよつど良かったってだけじゃねエの？……“そういう家系”なんだしよ」

和幸と沙希さんの会話を聞いていて私は疑心暗鬼に陥っていた。

沙希さんの言うことは尤もなのだが、沙希さんはすべて知っているからあんなコトを言ったのではないのか・・・そう思って不安になる。

私が“閻魔法王”だと知っているのは、私達と犯人だけ・・・。冥の言葉が脳裏をよぎる。

「まあ、確かに里乃さんが、代々天神に仕える巫女の家系だっことは知ってるけど・・・」

サーチオーロラをくぐれば、必然的に知ってしまうことだと沙希さんはさらっと答えた。

だが、秋波家の血筋をたどれば閻魔族につながる。私がくぐった際にはサーチオーロラに引っ掛からないように志貴さんが調節したはずだが、長年調査チームにいる沙希さんなら、調べるのはわけないだろう。

悪い方向へと思考が傾きかけた時、和幸の笑った顔が目に入った。

「しつつかし、里乃が巫女ねえ。・・・どーにもなあ」

ちらりと私を見る、和幸の目にからかうような色が浮かぶ。

「何よ・・・なんか、文句ありそうねえ？」

「いいえ、そんなこと、ありませんけどねえ」

完全に遊ばれているのはわかってはいたが、不安を吹き飛ばした

くてその誘いにのる。

「けど、何よぉ！」

「ならば、祝詞とか・・・他にも、色々あるだろ？そついつのは使えるのか？」

「使えるわよ、すっかり見えるものは見えたし。修行もしてたもの。それに、雑霊とか悪霊とか、何度も母さんが被ってるどころ、見たことあるから」

「・・・実践は？」

「2回だけ。低級霊とだけど」

私は本当のことを話した。むしろ隠した方が怪しまれるだろうと思っただから。案の定、和幸は感心したようにほお、と呟いたつきり、何も聞き返しては来なかった。

犬猿の仲!?

ピンポン……

控えめにドアホンが鳴る。

「……私が出るわ!」

ぱたぱたとドアの方に近づき、冥はドアを開ける。

「閻ま……、冥様」

「(呼び方には気をつけなさいと言ったでしょ) 由樹じゃない! ……いらっしやい。さ、中に入って」

「あ、はい」

由樹はおそろおそろといった様子で部屋に入ってくる。私と目が合うと少し表情を和らげる。

だが、和幸と沙希さんがいることに気がつくわずかに目を細めた。それだけで纏う空気がひんやりとする。

「……内部調査は、どうしましたか?」

「中間報告をまとめようと思ってな」

和幸は由樹を見ずにそう言った。……どうやら仲が悪いらしい。

肌で感じられる程に険悪な空気がその場に流れる。

「志貴様にはそのまま報告すればいいんです」

「そういうわけにはいかないね。調査結果には、確かな情報とあくまでも噂のレベルの情報があるんだ」

「そんなのは報告するときに省けばいいじゃないですか」

「・・・だから、省いてる途中だったの」

イライラした様子で和幸が答えると、由樹もイライラした様子で和幸から顔を背ける。

「あなたと話すのは時間の無駄だということがよく解りました」

そんな二人の様子を見て、冥が溜息をつく。

「ねえ、ちよつとさあ、喧嘩やめよーよ」

「っ！・・・も、申し訳ございません、冥様」

由樹は慌てた様子で冥に謝る。

「何であんなに仲が悪いんですか？」

こつそりと沙希さんに聞くと沙希さんは苦笑する。

「由樹さんは和幸の志貴様への態度が気に入らないのよ。いくら兄弟でも今は上官と部下でしょう？・・・まあ、それ以前に元々ソリ

「合わないのよね、あの二人」

「沙希、そろそろ行くぞ！志貴のヤツも待ってるだろうしな！！」

「志・貴・様です！！」

由樹がこめかみに血管を浮き立たせながら訂正する。和幸はそれを無視して私の方に向き直って言う。

「探しモノについては勝手な行動はするなよ、志貴から“死の荒野”へ行く許可は取っておくから」

「わかった」

私が素直に頷くと和幸は満足そうに微笑み、沙希さんを連れて部屋を出て行く。志貴さんと閻魔様に報告しに行ってくると告げて。

「じゃあ、あたし達は図書館に行く？“死の荒野”については、あたしも良く知らないし調べておいても損はないわ」

冥が私を見上げる。由樹も私を見つめて言葉を待っている。

このまま何もしないでもいるのも退屈ではあるし、冥の言う通りこれから行く場所くらいは知っておいた方が良さだろう。そう判断して私は頷いた。

「そうしましょう。・・・じゃあ由樹、図書館まで案内してくれる？」

先程は冥に任せてさんざん迷ったので、由樹を名指しして案内を



頼むと、冥は少し恨めしそうに私を見やる。

そんな冥の様子に気づかずに由樹は頷いた。

「わかりました・・・では、早速参りましょう」

## 図書館で知ったこと

どこをどう歩いたのかわからないほど複雑な道ノリを経て図書館に着くと、さっそく私達は過去の記録を探し始めた。

和幸達の言を信じるならば、裁きの間は過去に使われた記録が残っているはずだからだ。

「お姉ちゃん！・・・これじゃない？」

冥が古い革の装丁の本を持ってくる。閻魔界の暦で数えられた年号と共に、公式であることを示す印が押されている。

「この暦は・・・何年前のものなの？」

「180年前の暦ですね。・・・当時の秘書官が書いた記録書ですよ。」

由樹が冥の手元にある本を覗き込んで答えてくれる。さすが、閻魔直々の部下をしているだけはある。

私は閻魔界のことについての知識は全くと言って無いし、冥でさえ大昔のこととなると把握してないことが多々ある。

由樹がついて来てくれたことに感謝しつつ、私達は記録書を読み始めた。

「・・・えっと、『裁きの間が本日付けで移転となる。先日まで使

われていた裁きの間は来るべき時まで封磨様ふうまの手により封印されることになった』・・・封磨?」

その名は聞き覚えがあった。

いや、聞き覚えどころではない。それは、父さんの名前だったのだ。

私はその名前を呟いたきり黙り込んでしまったので、冥は心配そうに私を見つめてくる。

「封磨様は閻魔法の中でも飛び抜けた力をお持ちでした。閻魔法王候補とまで言われた方なんですよ」

誇らしげに由樹は教えてくれる。そんなの知らない。私の父さんは……。

「由樹、余計なことは良いわ。この裁きの間が封印されるに至った経緯を調べなくちゃ」

冥が由樹の話を逸らす。

私は思わずほっと胸をなで下ろした。私の知らない父さんの話を聞きたくなかったのだ。

父さんのことは母さんから良く聞かされていた。優しく、聡明で、そして、誰より母さんを愛していた父さん。

それが、閻魔法王候補とまで言われた閻魔法だなんて、頭では理解していても、感情がそれを受け入れたがらない。私にとって、父

さんは父さんだ。他の何でもない。

「失礼致しました、冥様。・・・裁きの間を移転した経緯としては、当時の閻魔様・冥様のおお祖父様に当たられる方の決定によるようです。どうやら何かの仕掛けを施してそれを封印術に長けていらした封磨様が封じたようですね」

「由樹、もっと前の記録ってあるの？」

「ええ、ありますよ」

「じゃあ、この裁きの間が出来た頃っていつかしら」

探しているのは、私の力。どういう形で封じられているにせよ、それは変わらない。だから、知るべきはこの裁きの間がなぜ私の力の封印場所選ばれたのか、だ。

ならば、裁きの間として使われることとなったところから読み進めていくのが、手間はかかるが、確実な方法だろう。

「・・・出来たのはこの閻魔界と同時ですが、この裁きの間は実際には初代の閻魔様の頃と、この記録書が書かれた頃の5年間しか使われていません」

「・・・どういうこと？」

冥が由樹を見上げる。どうやら冥も初耳だったらしい。その視線を受けて由樹は奥の書架から分厚い本を持ってくる。

「これは閻魔界の史記です。天神の一員として閻魔族の方々が今の

役割を受けられたときのことからずっと書かれています。そして、裁きに関する事項の中に裁きの間の記述があります」

由樹が指し示すページを冥が読み上げる。

「『初代閻魔は優れた力を有し閻魔界を治めた。退位の後、彼は閻魔法王と呼ばれる。閻魔法王は即位の際に裁きの間をつくられた。転移の泉の水を利用し赤き炎と青き炎の間に北庁舎へと繋がる転移装置が置かれ、裁きを受ける者は裁きの間まで転送されるしくみとなっていた。』・・・『裁きの間は、使う者を選ぶ。閻魔法王のあらゆる力を込められて作られた為、その殆どの装置が大きな力を必要とし、次代の閻魔に選ばれた砂珠すじゆ様でさえ、扱いきれるものではなく』・・・『法王に並ぶ力を持つ閻魔が現われるまで、閉鎖とすることになった』・・・なるほど。それで、大お祖父様が使われるまで放置されていたのね」

読み終え、冥は私に史記を手渡してくれる。私はざっと目を通して、冥があえて読み飛ばした部分を黙読する。

そこには裁きの間がどのように使われたのか、そして、使うためにはどれほどの力が必要だったのか、事細かに記されていた。

この裁きの間を閻魔法王が使えば、照査室にあるサーチオーロラと同じ能力をこの閻魔界全域で発揮することが出来る。つまり、誰も閻魔法王に隠し事が出来なくなるわけだ。

「なんか、わかった気がする」

私は呟いた。

冥と由樹が私の方を向く。その顔には戸惑いの表情が浮かんでいる。

「この捜し物は今回の事件と全く無関係じゃないってことよ。裏切り者のねらいはこの裁きの間の破壊だわ。それだけ都合が悪いことをしている」

「幹部ならば、サーチオーロラをくぐることは皆無と言っていいですからね。悪さしてもバレることはない。でも、この裁きの間が復活すれば……」

由樹の言葉に頷く。

確かに余裕もなくなるはずだ。私を亡き者にしなければ自分達が危うい。

「勝手ね。……自分達のためだけに裁きの間を破壊しようだなんて。……でも、古参の連中が犯人なら、とつくの昔に裁きの間を破壊したっておかしくないのに……」

「封磨様のお力でしょう。……閻魔王がいらっしやるまでの間、何人たりとも立ち入ることが出来ない結界を張ったのだと思います」

冥の疑問に由樹が答える。確かに誰も入れないようにしないと封じた意味がない。まさか250年前に予期していたとは思えないが、同じような事態を想定して封じたのだろう。

それに、封じた本人なら再び入ることも可能だろうから、私に渡すものを隠すことも出来たはず。

他人事のようにそう考える。

「まあ、大体のところはわかったわね。・・・そろそろ帰りましようか。もうこんな時間だし」

冥が時計を指す。デジタルの表示が19時になっていた。

私が死んだのが今日の朝7時。まだ、死んでから半日しか経っていない。一気にたくさん情報が頭に詰め込まれたものだから、それしか経ってないとは思えなかった。

「里乃お姉ちゃん。食堂に行こう？・・・あたし、お腹空いちゃった」

「そういえば、私も死んでから何も食べてない」

由樹がギョっとした表情を浮かべるのが見え、そういえば変な言葉だと思う。死んでから何かを食べるなんて行動をするのはあり得ないから。

「里乃お姉ちゃんってば、そんなストレートな言い方しなくてもいいのに。」

けらけらと笑いながら、冥が見上げてくる。

確かに、こっちに来てからとか、ただ単にお腹空いたねとか言えば良かったのだ。でも、“死んだ”ことには変わりはない。しかし、聞き手の気分を考えると遠回しに言った方が良かったのだろうか？

「素直で真っ直ぐなのは、里乃さんの良いところですね。」

気を取り直した由樹がにっこりと笑った。お世辞でもなんでもなく、そう思うのだと告げる由樹に私は思わず苦笑した。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3683z/>

---

死神と私

2012年1月5日01時50分発行